慈燈文学の一考察

——1942年『大同報』掲載作品を中心に——

李　　青

はじめに

軍人作家の楊慈燈（1915-96年）が軍旅生活を題材にした小説は、満洲国[1]では広く知られていた。1942年以前は『泰東日報』を主な拠点として書き続けていた。1931年のデビュー作「涙」（『泰東日報』）11月21日、23日掲載）を皮切りにして、秀逸な短編を世に送り出していた。もちろん、他の雑誌や新聞にも投稿が散見される。

ところが、1942年に発表した作品のほとんどは『大同報』に掲載されるようになった。すると、作品の内容も作風も、それ以前とは変質したのである。1942年10月30日の『大同報』に掲載された楊慈燈を紹介する記事には、楊慈燈が「本紙の特約」であるという文言がある。そこから、楊慈燈が『大同報』側から、小説の創作や原稿の執筆依頼を受けていた事実がわかるのだが、はたして「特約」だけが作品が変質した理由なのだろうか。

そもそも、『大同報』は満洲国政府の機関誌である。その前身は清末に遡

---

(1) 1931年9月18日の満州事変により、日本が中国の東北三省（黒竜江、吉林省、遼寧省）を武力占領した。1932年3月1日、清朝のラストエンペラー愛新覚羅溥儀を執政にして、長春を首都（1932年3月14日に新京と改められた）にし、満洲国を建国した。1934年から帝政を実施し、愛新覚羅溥儀が満洲国の皇帝の座についた。

満洲国は元号を大同とした。帝政実施に伴い、1934年3月1日から、康徳に改元した。1945年8月18日に日本の敗戦により、満洲国は幕を閉じた。

満洲国の傀儡性と欺瞞性から、中国は満洲国の正当性を認めず、一貫して「偽満洲国」と称する。学術研究もこの名称を今日まで踏襲してきた。

筆者は学術研究の真実性を追求するために、満洲国時代に使われた旧称を論文でそのまま使用する。満洲国の欺瞞性、傀儡性、日本の侵略性を否定するつもりはないことを断っておきたい。

ることが可能である。満洲国建国後にはいわゆる傀儡政権の管理下に置かれ、マスコミ運営への影響は、新聞各紙にも顕著に現れるようになった。1933年3月1日から『大同報』は組織改編をし、版面を増やし、印刷方法も変更する旨の告知が、2月末日の第一面に掲載されている。そこから満洲国政府の機関紙として10年間存続してきた。太平洋戦争勃発後、戦況がますます厳しくなると、日中戦争が泥沼化していたこともあり、満洲国の経済状況もまた危機的な状態に陥ってしまう。したがって、新聞各誌も統合を迫られるようになった。こうした背景の下で、『大同報』は1943年6月1日から『康徳新聞』と改名した。

『大同報』は王希哲[(2)]が発行人兼社長を務めていた。版数は、年によっては12版から4版までと、ばらつきが見られる。本論で使用する1942年の『大同報』は、ほとんどが4版から6版である。紙面の前半は政治、経済、軍事、国際、国内、吉林のニュースなどで占められ、後半に文藝副刊があり、小説、詩歌、劇などが掲載されていた。他に風俗習慣、文化教育、科学歴史、経済などの内容も豊富に盛り込まれていた。カラフルな広告からは、当時の世相や流行、社会の経済状況と科学進歩の度合いも垣間見ることができる。

本論は、満洲文壇で活躍していた楊慈燈が、1942年に『大同報』に執筆した作品から、読み取れる現象を検証することを目的とする。太平洋戦争が勃発し、日本陣営と欧米諸国陣営とが対峙し、欧州やアジアの各戦場で激しく角逐していた。一方、満洲国内では『国兵法』(1939年4月11日頒布、15日実施[(3)])の実施に伴う、日本軍部主導による満洲国軍に対する整理整頓が本格

---

(2) 王希哲(1880-194?年)。本名は王光烈、字は希哲。河北秦皇島生まれ。北京大学の前身である京師大学堂を卒業。著名な書道家、篆刻や文学にも造詣が深い。奉天(瀋陽)両極師範学校や法政専門学校、公立専門学校の教員を務めた。1912年に『東三省公報』主編を務めていた。1934年8月に『大同報』の社長に就任した。著書には『希哲廬』、『文学大義』、『希哲廬雑俎』、『印學全議』など多数ある。

以上は「東北人物大辞典」編集会『東北人物大辞典』(遼寧人民出版社・1991年、678-679頁)と大久保明男編『偽満時期文學資料整理與研究』「偽満洲国主要漢語報紙　文藝副刊目録」(北方文藝出版社・2017年、133頁)に依拠した。

(3) 『国兵法』は1940年4月11日に公布、15日に実施した。アジア歴史資料センターに保管された『満洲国政府公報』から閲覧が可能。『大同報』は同年4月20日と21日に、上・下に分けて、濱江省(現在の哈爾浜)民生庁長の劉澤漢による『国兵法』の解釈を掲載している。劉は『国兵法』の特徴は以下の8点であると解説している。

一、すべての男子国民(徴兵適齢は19歳)は、条件に適った者は貧富の高低に関わらず、平等

化し、近代的な正規軍を目指す動きがあった。各種の取材と従軍記者のレポートは、1940年からの『大同報』の紙面から随所で確認することができる。満洲国軍についての記事は特に紙面を惜しむことなく、また形式も問わず大幅な紙幅を占めている。大々的な宣伝の規模からは、満洲国軍への積極的な寄与を感じずにはいられない。

本論で用いる『大同報』は、「抗日戦争与近代中日関係文献数据平台」[(4)]が提供する1933年１月13日―1942年10月31日の『大同報』のデーターベースをテキストにする。なお、本データベースには判読できない部分と欠損などがあり、1942年の新聞紙上における楊慈燈の作品をすべて網羅しきれたとは言えない。しかしながら、既刊の『楊慈燈文集』（三種）[(5)]と並列して参照してみるとき、上記『文集』には含まれていない作品があり、1942年の楊慈燈文学の輪郭はほぼつかめたと言えるので、本論文に関わる部分の資料はほぼ揃っていることを確認できたと考えている。

楊慈燈の先行研究は、多くない。『楊慈燈文集』（上巻）に長めの序兼評論[(6)]がある以外に、若手研究者陳実[(7)]の専門書や研究論文がある。

に徴兵に応じなければならない。

二、三年間服役する。事情に応じ、一年間短縮しても良い。国民の負担を減らすことを心がける。

三、個人的に健康診断不合格となった者、家庭事情のある者、免除することができる。

四、犯罪歴のある者は延期する、または免除する。兵士の徳を重視する。

五、被徴兵者の教育事情を配慮する。被徴兵者は在学中の場合はそのまま学業を継続することが出来る。徴兵延期は30歳までとする。

六、精神疾患のある者は免除される。

七、軍人を厚遇する。

八、適齢者は不法に徴兵を逃れる場合は、罰則を科す。

なお、『国兵法』の執行前後に合わせ、満洲国内では、幾度も各界の要人による座談会を催した。

(4)「抗日戦争与近代中日関係文献」のデーターベースは国家社会科学基金である「抗日戦争研究専門プロジェクト」の段階的成果として、中国社会科学院、国家図書館、国家档案館が発起人となり、中国社会科学院近代史研究所がデーターベースの作成を請け負った。

本データーベースは1949年以前の文献を収録している。档案、書籍、雑誌、新聞、写真、動画が含まれている。

(5)①『楊慈燈文集　上巻・中巻・下巻』（遼寧人民出版社　2015年）

②夏（楊慈燈）園著　『民国往事……』（中国語タイトルは741文字があり、日本に訳す場合は最初の四文字を取る―筆者）６巻　（貴州人民出版社　2017年）

③劉暁麗編　『偽満時期文學資料整理與研究』作品巻「慈燈作品集」（北方文藝出版社　2017年）

(6)　初国卿「序」『楊慈燈文集　上巻』（遼寧人民出版社　2015年）、１-12頁。

上述のように、楊慈燈は1942年に『大同報』に頭角を現すようになった。『大同報』と楊慈燈をめぐっては、いくつかの疑問点が生じてくる。第一に、楊慈燈が『大同報』に接近してきた真意は何なのだろうか。第二に、太平洋戦争勃発後に、楊慈燈は退役しているが、退役と『大同報』に執筆の場を移したこととは、何らかの関連性があるのだろうか。第三に、10年間におよぶ満洲国軍での軍旅生活は楊にとって、いかなるものだったのだろうか。いずれにしても、楊慈燈の心境の変化が、疑問を解く鍵になるのではないかと思われる。

一、楊慈燈と『大同報』

1　楊慈燈と軍官学校

1942年10月31日の『大同報』は、楊慈燈の中編小説『若い人』（年軽人）について、著者の紹介を兼ねながら、紹介している。

楊慈燈のことを、「多くの町の治安の重責を預かっている青年軍官である。軍人出身の文化人である。彼は文学に情熱を持っている。数年来激しい戦闘に身を投じながら、匪賊の掃討をしている。しかし、文学創作は休むことがなく、充実した内容をもって、文章の力量を増してきている。以前には童話小説に長けており、すでに二冊が出版されている。近年は、雑文や随筆を丹念に書いている。このたび、中編小説は初めての試みであるが、その努力と奮闘は計り知れない。将来的に満洲の火野葦平になるだろう[8]」と紹介している。将来的には、日本の戦争ルポルタージュ作家の火野葦平と肩を並べることになろうと、高く評価しているのである。

楊慈燈は本名が楊小先であり、1915年に山東省で生まれた。ペーンネームには楊慈燈、慈燈、楊少尉などがある。幼少時代に家族と共に大連に渡り、十代後半に日本人経営の軍官学校に学び、卒業時に少尉に任官されたという。しかし、軍歴や軍官学校の在籍年数には不明なところが残る。従前では、楊慈燈の研究者陳実と楊慈燈の子息の説に依拠することが多い。陳実『東北淪

(7)　陳実『東北淪陥区童話研究』（北方文藝出版社　2019年）

(8)　火野葦平（1907-1960年）、小説家。日中戦争時に応召され、『糞尿譚』が芥川賞を受賞した。戦争従軍体験で『麦と兵隊』などを発表し、大きな話題を呼んだ。兵隊作家として一代を風靡した。作品は満洲国にも紹介されている。

陥区童話研究』では、楊慈燈の履歴を、「1927年、12歳で大連に渡る。1930年に最愛の母と叔母が相次いで亡くなった。家計が苦しく、中学を中退した。1932年に旅館で働き、旅館の主人などの援助で学業を続け、日本語までマスターした。1932年９月に旅館の日本人宿泊客から、軍官学校を紹介してもらった。年末に錦州省錦州市黒山県大虎山鎮にある軍官学校に無事に入校ができた。1935年の年始めに卒業した。20歳未満で最年少の少尉軍官として熱河省承徳市第五軍管区司令部兵事処に派遣された[9]」と詳しく紹介した。一方、楊慈燈の子息夏は、「二年間悪魔のような訓練を経て、学校に残り、一番年が若い教官となった。それはまだ20歳未満の年であった。太平洋戦争勃発後に、病気を理由に軍隊を離れ、著作を専念するようになった[10]」と述べるにとどまる。

上記の両説を総じて推定すると、軍官学校に入ったのは、17歳の1932年であり、卒業し、教官になったのが、1935年となる。二人とも軍官学校に２年間在学したと述べている。だが、二人の説では、何という軍官学校に入校したのかは明らかではない。そして、『満洲国軍』（星蘭会・1970年）が纏めた年表によると、1932年11月１日、奉天で中央陸軍訓練処が開校されたと記されている[11]。楊慈燈が1932年―1934年に軍官学校に在籍していたのは、中央陸軍訓練処だと思われるが、中央陸軍訓練処の運営状況は定かではない。また現在のところでは、満系卒業生に関する資料が乏しく、今後は『満洲国政府公報』などの資料に当たり、楊慈燈に関する説得力ある情報をつかみたい。

2　『大同報』の副刊

『大同報』は政府の機関紙として、国家の政治、経済、軍事、教育、文藝、民生など多岐にわたる報道に版面を割かなければならなかった。この中で文藝副刊の存在は特別な意味を持っていたことに注目したい。副刊とは文藝コラムのことである。そこにあらゆる形式の文学作品を掲載し、重苦しい他の版面と比較すれば、このコラムは常に新鮮な風が吹きこみ、若芽が地を突き破って生えてくるかのような初々しさが感じられる。さらに若手と文壇の重

(9)　前掲、『東北淪陥区童話研究』、126頁。
(10)　前掲、『楊慈燈文集』（下巻）「慈燈小伝」付録一、2616-2617頁。
(11)　満洲国軍編纂委員会編『満洲国軍』（星蘭会　1970年）、899-915頁。

鎮作家とのハーモニーが織りまぜられ、文芸欄には常に新鮮さに溢れていた。

しかし、傀儡政権下の新聞運営の場合は、為政者の意向をくみ取ることに細心の注意を払うことが必要になる。新聞運営を牛耳る関東軍による干渉は避けられなかったからである。それは新聞欄に明白に現れている。にもかかわらず、副刊の編集者たちは、政治と一線を画す運営をするように努めてきた。重石の隙間から生存空間を模索している魂胆こそ、文芸欄が異彩を放つ理由であろう。ゆえに『大同報』の副刊は、政治の干渉を最小限に食い止めながら、比較的独自の自由な路線でやりくりしていた。

『大同報』は、30年代初頭にコラム名はそのまま「副刊」と題していた。この後に、編集者の交代、または編集方針によって「大同倶楽部」、「夜哨」、「満洲新文壇」、「文藝」、「藝文」、「我們的文学」、「新文壇」などのコラムが登場し、異なる特色があった。

文藝コラム「藝文」に、1942年5月13日に「周作人先生訪問記」[12]と題して、編集者堅矢による華北地方の文化人周作人へのインタビューを掲載した。周作人は当時、汪精衛政権下で北京教育総署督辨の肩書きで、この時期に汪精衛と共に公式に満洲国を訪問した。在満中に『大同報』の要請で、編集者の堅矢のインタビューに応じた。周作人の「満洲の副刊の状況について」という質問に対して、堅矢は以下のように答えている。

> 満洲新聞の副刊は各社でそれぞれ異なる。以前から各社が（副刊の編集を一筆者注）大変重視してきた。分量的に三版を組むところと二版を組むところがある。今日、紙の節約を呼びかけられている中でも、各社は必ず一版をキープしている。原稿はいずれも愛好者の投稿に頼り、特約の原稿もある。原稿料はあまり良いとは言えないが、青年作家たちの情熱から躍進している国家の前途を感じる。中国語紙は日本語紙との相違が多々ある。日本語紙の場合は簡素な評論または雑文が多いことに対

(12) 周作人（1885-1967年）、中国現代の著名な文学者、翻訳家。魯迅（周樹人）の弟。1906年に兄の魯迅と共に日本に留学し、日本文化に親しんでいた。1937年、北京が日本に占領された後、日本が支持していた汪精衛傀儡政権の要請に応じて重要なポストに就いた。1942年5月に汪精衛と、満洲国を訪問した。その間、『大同報』のインタビューに答えた。

1945年に日本が敗戦した後に対日協力者として漢奸裁判にかけられたが、1949年から共産党政権下で寛容な待遇を受け、半隠居生活を送った。

して、中国語紙の場合は創作が多い。これはそれぞれの事情があるからだ。日本語の場合は新聞以外に数多くの雑誌がある。中国語はそれには及ばない。日系人（日本人―筆者注）は新聞を読むために新聞を読むから、ほとんどの人が新聞に触れている。だが、彼らは必ずしも文藝に興味を持っているわけではない。しかし、中国語紙の場合は多少文学の嗜好のある人でなければ、定期購読はしない。もしも、中国語紙を日本語紙のように編集すれば、多くの読者はがっかりするばかりでなく、文学青年が作品を発表する場所がなくなってしまうだろう。満洲の新聞の副刊と満洲にわずかしかない雑誌は、すべて趣味ばかりに傾倒していないところが幸いであろう。

堅矢の説明では、新聞各社は紙幅が限られる副刊（文藝欄）を重視していることがわかる。自分たちの文学を活字にする機会を得ることは、文学青年にとって、才能を発揮することができ、社会に認められるステップであろう。新聞社にとっては、若者たちの声を社会に届けることが責務であり、また願ってやまないことである。読者層は満洲全土の識字率の低さからだろうか、日本語紙のように新聞を読むための新聞にはならず、多少の文学の愛好者でなければ読まないか、定期講読しないことも読み取れる。

堅矢の説明に周作人は、「新聞や雑誌がすべて娯楽や趣味に傾倒すれば、真の文学作品は普及出来なくなる。悪趣味は良くない」と指摘し、健全な文学を提案した。

副刊の自由な雰囲気を利用し、中国共産党地下組織は友人関係を利用して副刊「夜哨」を1933年８月３日から設けることに成功し、約半年弱の間に「夜哨」を拠点に多くの作品を世に送り出した。この問題は平石淑子「『大同報・夜哨』と東北作家―李文光「路」を中心に」の論文に詳しい。[13]

3　慈燈と『大同報』副刊

以下、慈燈が登場する1942年に絞り、『大同報』の副刊との関わりについ

---

(13)　平石淑子「『大同報・夜哨』と東北作家―李文光「路」を中心に」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第30号　P99-114）。

て述べたい。

慈燈の作品が最初に『大同報』に現れたのが、1938年７月７日の「妻の威厳」（妻的威厳）である。以後1942年まで、『大同報』に発表した作品の数は極めて少数だった。けれども、1942年に発表した作品の大半は、『大同報』に掲載されている。筆者が見いだした作品は、30編である。1942年10月31日付け『大同報』に楊慈燈の中編小説『若い人』（年軽人）の宣伝広告を出す際に、「11月１日から本誌に連載を始める」とある。残念ながら本論で使用するデーターベースには、1942年10月31日までしかないため、その後に連載があったのか、確認できていない。1943年に開明図書公司から『若い人』（年軽人）が単行本として発刊されたが、筆者は未見である。

なお、10月31日の副刊で紹介された『若い人』（年軽人）のあらすじは、子息の夏正社が編集した『楊慈燈文集』の中巻に掲載された『若い人』（年軽人）とは異なる。夏正社は巻頭で、「最大限に当時の新聞の風貌と文章の特徴を再現するために、『楊慈燈文集』を編集する際に、修辞、言語風格、方言及び口語表現などをなるべく原文のままにした[14]」という説明を信頼するならば、単行本として発行する前に、楊慈燈本人による裁断で、ストーリーの一部を変更にしたと推測できる。変更された内容は、『大同報』の原文と当時の単行本をすりあわせて確認するしかない。本論で触れる『若い人』（年軽人）は、『楊慈燈文集』に掲載されたものに依拠する。その他の作品はいずれも、『大同報』に初掲されたものであることを断っておく。

1942年10月まで『大同報』に発表された作品は、以下の31編である。

①５．２　「知識のある女性」（有知识的女性）→評論
②５．11　「男女の恋愛問題」（男女交朋友）→評論
③５．21　「勇」（勇）→評論
④７．23　「李さん」（老李）→小説
⑤７．26　「馬」（馬）→小説
⑥７．29　「泰林伝」（泰林小伝）→小説
⑦７．31―８．１　「往事」（往事）→小説

---

(14)　前掲、『楊慈燈文集』（上巻）、1-2頁。

⑧8.12 「精神病」（精神病）→小説
⑨8.21 「志のある兵士」（有志気的兵士）→小説
⑩8.22―8.23 「夢」（夢）→小説
⑪8.24 「月のない夜」（没有月亮的晚上）
⑫8.25 「行軍」（行軍）→小説
⑬8.27―8.29 「洪水」（大水）→小説
⑭8.30／9.5 「戦闘」（戦闘）→小説
⑮9.4 慈燈童話集「ほら吹き万年筆」（吹牛的鋼筆頭）
⑯9.18 「私は俳優になりたい」（我想当演員）→小説
⑰9.19 「模倣」（模仿）→評論
⑱9.23 「題材」（題材）→評論
⑲9.28 「略奪愛」（搶親）→小説
⑳9.27 慈燈童話集「一本の小さな草」（一棵小草）
㉑9.29 「愛の物語」（愛的故事）→小説
㉒10.6 慈燈童話集「海の話と光」（海の話と光）
㉓10.7 「良い人と悪い人」（好人和坏人）→評論 （※署名：磁燈）
㉔10.8 「満洲の戯劇文学」（満洲の戯劇文学）→評論 （※署名：楊上尉）
㉕10.9 「明るい文章」（明朗性的文章）→雑文
㉖10.10 「我々の劇団」（我們的劇団）→雑文
㉗10.11 「軍隊生活が私に与えた影響」（军队生活给我的影响） 雑文
㉘10.13 慈燈童話集「蝶蝶詩人」（蝶蝶詩人）
㉙10.17 「創作について」（也是谈写作）→評論 （※署名：磁燈）
㉚10.20 童話集「園邊」
㉛10.24 「夜勤の歩哨兵」（夜間勤務兵）→小説

その他、11編の小説または小説集が、他紙（他誌）に掲載されたか、出版された。

1942年1月1日の『大同報』の副刊は、前年度に続き、「我々の文学」（我們的文学）コラムが新年の作品で賑わっていた。1月5日から副刊を一新し、「藝文」と改めた。このコラムは他の副刊と比較して、比較的長く、足かけ7ヶ月間続いた。楊慈燈は「藝文」に15編投稿している。満洲文壇の著名な

文化人も、派閥を問わず、積極的に参与していた。呉郎、呉瑛、古丁、爵青、疑遅、山丁、季風、柯柜、外文、小松、冷歌、舒群など、のちに抗日作家と褒め称えられる文人が名を連ねていた。

3月28日に蘇生と署名した「地方文藝を建設せよ」に、コラム「藝文」に込められた真意と思われる一節がある。文藝建設は政府が公布した「藝文政策」に呼応し、地方文藝を振興しなければならないと前置きをしてから、“文藝”と“藝文”の関係性を説明した。「“文藝”（に含まれる内容—筆者）は、“藝文”の重要な大部分を占める。もしも、文化が文藝をもって栄養補給をしなければ、生活はできないだろう。“藝文”には広義の解釈があり、“文藝”を摂取しなければならない」。

この機運に乗じ、『大同報』は3月31日付けで、「懸賞募集短編小説」の広告を出した。小説内容の規約には、「1、国民のスパイ防止意識を高めるもの　2、国防資源を保護し、銃後で職務能力を促進するもの　3、戦時下における明るい生活を表現するもの、戦争と直接または間接的な関係のあるものはすべて良い」とあった。受賞作品の賞金は、甲が25元、乙は15元である。楊慈燈の同時代の小説に出てくる金銭に関わる場面から推定すると、悪くない臨時収入であろう。後日、採用された楊慈燈の作品は規約の3、に合致している。

慈燈にとって、規約3、が投稿動機になったはずである。自分の文学趣味に合致し、書き慣れた戦争小説を掲載してくれる保障があるため、『大同報』に連投したと考えられる。

やがて、9月1日から『大同報』の副刊は再びリニューアルし、「新文壇」が立ち上がった。

この前後から楊慈燈はペーンネームの「慈燈」を用いて、新たな副刊に頻繁に登場している。これ以後はペンネーム慈燈で論を進める。

なぜ主な作品を『大同報』に発表したのだろうか。慈燈の心理には、どのような変化があったのだろうか。慈燈の作品から手がかりを探ってみたい。

二、慈燈小説と1942年

慈燈の小説は自伝的な傾向が強い。1942年7月29日に発表した『泰林小伝』では、主人公泰林の友人である私は「すでに軍営生活に別れをつげた」

と書いてある。慈燈が退役した事実は、彼の身内の手になる「慈燈小伝」や他の研究者の説と合致している。1932年の軍官学校入学から数えると、慈燈は10年間の軍旅生活を送ってきた。退役後に文学創作に時間的に余裕をもつことができ、推敲を重ねた作品が数多く生まれた。

一方、1942年は満洲国建国10周年であると同時に、『国兵法』実施から二年が過ぎた。まさに新興国家の「節目」の年になる。『大同報』は建国記念日に合わせて、3月1日に「満洲文化十年特輯」を組み、10年来の「成果」を強調した。4月15日に『国兵法』の施行2年間に合わせ、写真付きの特輯と「今日は国兵法実施令2周年」と題した社説を発表した。満洲国軍の威光を誇示する社説だった。

1942年の『大同報』を通読すると、満洲国軍に関するニュースが、毎日目立つように一定の紙幅を占めていたのは、国家の運営に国軍の果たす役割が重要であると示す証拠であろう。将来に夢を抱き、軍官学校に学び、若手軍官としての自負を持っている楊慈燈にとっては、満洲国軍に対する自らの特別な思いがあったはずである。国家の意思を代表する『大同報』側は、3月31日の「懸賞募集短編小説」の募集要項に戦争関係の小説が意図的に入れられたことは、いかにも国策に沿ったやり方である。すでに戦争短編で一定の名声を獲得していた慈燈が積極的に応じたことは、文学の愛好者としての行為のみなのかどうかは、まず軍隊生活について書かれた短編から検証したい。

1　軍旅小説

慈燈は軍旅体験を基に、多くの短編小説を創作した。退役する1942年までに、軍旅作家として、かつ童話作家としても満洲文壇ですでに著名な存在だった。1942年になると、単行本として童話作品集『月宮里的風波』（藝文書房）、短編小説集『老総短編集』（藝文書房）を出版し、文学創作の成熟期を迎えることにもなった。

『大同報』に投稿した軍隊を題材にした作品は、いずれも1942年の下半期に集中している。全部で5編ある。

8月21日に発表した「志のある兵士」（有志気的士兵）は、一人称の「私」を使いながら、ある「勤務兵」との出会いを描いた。「勤務兵」は端麗な顔立ちの上、勤勉で向上心が強い。上司の私は時間があるときに、彼に科学知

識を教えていた。慈燈の小説に科学技術や戦術などをよく取り入れる傾向にある。たとえば、『老総短編集』に入っている「新戦術」の中では、軍官学校卒の若い二人の軍人が、近代的な戦術の吸収について切磋琢磨し、近代的な科学技術の優越性について熱弁し合い、憧憬する場面がある。二人の姿は、好奇心旺盛な若き慈燈自身の姿と重なる。彼自身は軍隊に残っている軍閥時代の陋習を一貫して批判していた。近代的な科学技術の知識を後輩兵士に精力的に伝授し、軍官学校で学んだ知識をもって、軍隊に新風をもたらそうと努力していた。「志のある兵士」に登場させた勤務兵は、残念ながら、ある戦闘で捕虜になり、勇敢不屈な軍人魂を徹したが、生死は不明だった。慈燈はこの若い兵士の姿から、「軍人は決して死を恐れてはいけない。この青年は聡明で志のある前途有望な愛すべき青年だと思う。彼の丁寧な勤務ぶり、真剣に学ぶ姿勢、ソフトな対人態度、軍人としての不屈な精神に敬服する。学ぶべきである」と最大な賛辞を送るのだが、慈燈自身の軍人魂の高揚感を描写していると受け取れる。

「行軍」（8月25日発表）はテーマの通り、満洲国軍の行軍光景が描かれている。同じテーマで異なるストーリーの小説が、『老総短編集』に収録されている。他の作品でも、満洲国軍が行軍する場面がたびたび目につく。読者は思わずその中に、慈燈自身が将校として東北の大地を行軍する姿と重ね合わせるだろう。大自然の描写、共に疾走している馬などは、行軍する軍人を引き立てたり、緊迫する雰囲気を醸し出したりしている。

重い荷物を載せている馬を描写した一節がある。

> 機関銃を乗せている馬は、泥まみれになっている。首や腹部は汗だくになり、滝のように流れてくる。口元には白く泡を吹いている。カバーに包まれた重たい機関銃は、まるでだるそうに馬の背中にもたれ、うとうとしているようだ。馬にむち打ちや威嚇はまったくいらず、よそ見もせず、汗ばむ頭をうつむき加減にしながら、一心不乱にもくもくと歩いている。

人に恐怖を与える機関銃を擬人法を用いて、場の雰囲気を和らげた。「仲間」の馬はあたかも意思疎通ができるかのようだ。馬は兵士の負担を減らす

ために、重い荷物をすべて一心不乱に背負っているにもかかわらず、何の不平不満も言わず、黙々と協力的な姿勢を示している。

自然を描写した一節を見てみよう。「樹々は孤独そうに小高い山の上に無言で座っている。山の斜面には、崖崩れで落ちてきた石が散乱している。樹々はこの毒々しい太陽の下で悶々と喘いでいる」。暑苦しい場面とは対照的に、渓谷の流水は「山の麓の木陰の岩の隙間から流れてきた渓水は、少しも暑さを気にせず、軽い賑やかな音を立ている」と写されている。

果てしない大地を駆け巡る兵士たちは、「喋る者は極めて少ない。誰一人口を開こうとする者はいない。暑さと疲労は、兵士の会話する元気を奪ってしまった。ただ頑強な忍耐力と頑固たる沈黙だけが残っている。（中略）彼らは歯を食いしばっている。辛抱強く忍耐している。両足を素早く動かして、黙々と前進している」と描写している。

慈燈はこのときにはすでに部隊から離れていたにもかかわらず、自分がかつてこのように行軍の列の一員であり、忍耐力をもって黙々とひたすらに歩いていたことを追憶している。戦友たちへの限りない尊敬が感じられる。擬人的手法はひたすらに行軍する兵士、動物、植物、自然風景を一体化し、戦争の残酷さよりも、どことなく人間らしい感動が与えられる。

同じ月の30日に「戦闘」を発表した。敵を狙撃する命令を受けた。ところが、営長（大隊長）は敵によって包囲され、危険にさらされている。兵士たちは救出作戦に乗り出し、苦戦しながら、勝利を納めたものの、営長（大隊長）は敵との戦いの中で、不幸にも命を落としてしまったのである。戦闘の激しさと残酷さよりも、戦友だった営長を失った無念さや仲間たちへの愛が感じられる人間味に溢れた一作である。

「泰林小伝」は９月29日に発表した。友人の泰林の死を追悼するために描いた作品である。泰林は幸せな四人家族に生まれた。小学校の教員をしている父は、読書と音楽が好きだった。だが母の急死をきっかけに、幸せな家庭の歯車が狂ってしまった。「父はいつものように読書に没頭しなくなり、音楽の研究も疎かになった。野馬のように、四本の足を思いっきり奔走させるようになった。疲れ果て深夜に帰宅することがしばしばある」と父の変貌ぶりが描かれる。そして、ついに父は逮捕されることになった。連行される朝、「顔にはまったく表情がなく、何の抵抗もないまま」と父を描き、父とは対

照的に、「人相の悪い凶暴な人」は、父が連行されるのを阻止しようとする子供たちを無理やり追い払った。

一月後に、父の死のニュースが伝えられてきた。「泰林の父と他の多くの人は、極悪非道の米英の勢力のせいで、侮辱的な罪名を着せられ、犠牲になった」と。当時は日本と満洲国は米英と敵対関係にあり、国民が非道に走ると、米英の勢力に惑わされたとこじつけることが多かった。音楽や読書が好きな父は、そもそも道理をわきまえることのできる知識人である。妻の死が耐えがたくて、はたして「非道」に走るだろうか。米英勢力に利用されたのは泰林の父だけでなく、他にも仲間がいたことから、「反満抗日組織」を暗に指しているのだろうか。読者の想像に任せるしかない。

ところで、ここからストーリーが急に違った方向に展開していく。なんと泰林は悲しみを乗り越え、「国軍に入隊したい」と志願する。泰林の風貌についての描写は、また特別に気を引く。「彼のがっしりした体格は、日本人青年の風貌のようだ。丸顔に細い顎、鼻筋が高い。拳は常に握りしめており、今にも人に殴りかかるかのようである。彼は恐ろしいほど沈黙しているが、それはあたかも野獣のような沈黙である」と。慈燈の小説には、日本人がほとんど登場しない。泰林の良い体格を、日本人青年に例えていることは極めて異例である。泰林は「僕は兵士になることは苦しいとは思わない。僕は喜んで自分の意思を鍛えるために厳しい訓練を受けたい。教科書は古いことしか教えてくれない。将来の（進むべき道―筆者）ことは、教科書には書いていない」と言う。「私」は泰林の立派な言動に感銘を受け、共に国軍に入隊したのだった。けれども、泰林は不幸にも戦死したのである。

おわりを、「小説はまるで虚構の物語のようである。しかし、事実はこれが確かに空想して虚構された物語である」と締めくくった。では、どうして、このような小説を虚構したのだろうか。

「泰林小伝」は「国兵法」施行２周年を記念する風潮の中で発表した。政府が「兵士になることは光栄である」ことを奨励するさなか、時流に乗って、主人公の泰林を作ったのではないか。父の逮捕と処刑は、すべて米英が悪を働いたのだと述べることと、「米英鬼畜撃墜」が叫ばれるなかで、この作品は創作された。まさに模範作だと言わざるをえない。身を国家に捧げるヒーロー泰林の体格を、日本人青年に例えること自体、英雄的な国軍兵士像にび

ったりと一致する。

昨今、慈燈は中国で愛国作家として再評価されている。ところが、「泰林小伝」は再版された各種の慈燈文集から外されている。物語が時局に迎合する傾向にあるからだろう。一抹の黒点も愛国作家につけてはいけない。だから、文集に収録されないのだと容易に想像できる。

10月24日に「夜勤の勤務兵」（夜間勤務兵）を発表した。前述の「行軍」は夏季に行軍する兵士の姿を描いた佳作だとすれば、こちらは厳冬の兵士の姿を見事に映し出している。満洲の冬の寒さと雪は、自然界の凄まじさ、厳しさ及び美しさから、文人たちにこよなく愛されている。慈燈も例外ではない。吹雪の中で歩哨に立つ兵士を引き立てるには、周辺の動きを描くことによって、読者に感じ取ってもらう。馬小屋で休憩を取っているはずの馬は物音で耳を立て、大きな目を開き、周辺を警戒している。駐屯地にともされている薄暗い電球、兵士同士で交わされる合い言葉、降りしきる真っ白な雪、兵士は交替で歩哨に立ち続けている。慈燈は従軍時に自分もこのように吹雪のなかで勤務していた日々のことを思い起こし、作品の兵士姿の描写には愛おしさがにじみ出ている。

2　庶民生活に目を向けて

軍旅生活を題材にした小説以外に、庶民生活に目を向ける作品にも力を入れている。天災、戦乱、貧困、飢餓、社会の不正、不合理、旧因習、精神的な苦悩からもたらされた苦難と歪みは、慈燈の小説から随所に読み取れる。

知識青年の苦悶を告白する作品は、慈燈文学の中で多数見られる。太平洋戦争後に満洲国内も戦争協力のムードが濃厚になり、生活のあらゆる面において、緊迫の度合いが増してくるのである。

慈燈は10年間の軍旅生活から退役したとき、まだ30歳未満だった。現実を目の当たりにしたとき、将来への不安はなかったのだろうか。この時期の作品から、慈燈の精神世界を覗いてみる。

８月12日の「精神病」は、精神衰弱を煩った物書きの青年の物語である。青年は被害妄想に陥ってしまい、他人に害されることに怯えきっている。机にある目覚まし時計の音に異常に反応し、周りの雑踏にも心を乱され、創作がまったく手につかないほど病んでいることをリアルに描いた。「私は病床

に横たわっている。しかし、私が何の病気を患っているのかを誰一人教えてくれる者がいない」と社会から見捨てられていることを示唆して、おわっている。

8月22日から23日に連載した「夢」は、後味が悪い作品である。朝方に「雄鶏が何度も鳴いた。何度鳴いても夜は明けない。そもそも夜は明ける気配はなさそうである」。うとうとしていると変な夢を見た。廃墟の洞窟に死体がある。死因は廃墟にある黄金を持ち出そうとした時に、守護神の鬼に追われ、死に追いやられた。悪夢から目が覚めても、「夜はまだ明けない。恐らく夜は明ける時間になっていないからだろうか」。二番目の夢は、恋愛が成就しない話である。三番目の夢は、自分が10万人の兵士を指揮する総司令官になった。閲兵式で演説しようと思った時に、兵隊は敵の入り仕掛けに嵌められ、すぐ降参してしまった。「私」は解任させられ、逃げ出してしまう。この夢からは、現役時代のストレスが感じられ、慈燈の日常もこのような悪夢に魘されることがあるかもしれなかったと思わせる。

8月27日から29日の「洪水」(大水)は、村が未未曾有の洪水災難に見舞われる。筏や船で水没した地域に足止めされた人々を、安全な場所に移送するビジネスが流行りだした。一儲けしようとした船頭は、法外な値段を吹っ掛けてくる。しかし、政府が派遣してきた救助船は、船賃が払えるお金持ちしか運ばず、溺れそうな貧乏人を見ても見ぬふりをするか、船賃を払えず助けを求めてきた人に暴力を振るい追い払うのであった。救助を装って、若い女性に乱暴する事案も、政府の救助船の上で頻発していた。著者は「これは尊厳をもっている政府が国民に施す救済なのだろうか」と、「政府」の外套を纏っている悪徳救助船に怒りをぶつけた。水害でもたらされた結果は、人々が家を失い、女性は妓女に成り果て、娘や寡婦まで商品として売られる惨状だった。政府の無策や人身売買まで横行していることを批判した。

9月28日に発表した「略奪愛」(搶親)は、古い因習を揶揄している一編である。極貧の家庭生まれの16歳の娘は、密かに売春をしながら、一家を養っている。婚約先と関係がこじれて、実家にとどまり、嫁ごうとしない。しかし、婚約先は何の話し合いもせず、ある日、突然彼女を無理やりに連れ去ってしまった。働き手がいなくなった実家は、全員乞食に成り果てた。16歳の少女の悲惨な運命を嘆く。

「李さん」（老李、７月23日発表）と「馬」（７月26日発表）は知識人の不遇や年老いた画家の気骨のある生き方を描いたものである。

三、慈燈小説の変容

1　雑文、評論

慈燈文学には雑文や評論が数多くある。1942年の場合は『大同報』文藝コラム「藝文」または「新文壇」に掲載されたものが多い。当時の文人たちの思いはいかなるものなのかを分析してみる。

９月１日に文藝コラム欄は「新文壇」のタイトルに変更し、新たなスタートを切った。編集部は新しい「新文壇」コラムの立ち上げに際して、「我々はこれまでの水準を保持するとともに、新人の参与を期待する。並びに満洲文壇のベテランと共に、この新コラムを盛り上げていただきたい。（中略）新しい文壇は、新文学を建設する工場である。大東亜聖戦が日々勝利を納めている今日、読者の皆様とともに（新文学を）建設しよう」と呼びかけ、いかにも時局を意識した文言が数多く盛り込まれた。さらに之白の評論「新文壇の建設」（新文壇的建設）のなかでも、社会情勢を意識した文学創作を呼びかけた。「我が国は英米とソ連とは違う。国家認識すなわち空間認識は彼らと異なる。満洲国では独特な文学が必要である。それは18世紀、19世紀あるいは康徳８年12月８日（大東亜戦争勃発の年月日―筆者）以前の古い文学ではない。当然ここで新文学を作らなければならない。あるいは東亜の環境に適している新秩序の元で文学を建設中なのである」と。

10月３日には、楊楊が「大衆の文学」（大衆的文学）で、大衆のための文学を創作することを呼びかけた。同月、熹微が「新文壇と我々」（新文壇与我們）を寄稿し、新しいコラム「新文藝」に期待している思いを吐露している。

> 新しいコラムは、我々に多大な満足と喜びを与えてくれる。文学愛好者の我々にとっては、少なくとも以前のような惨めな飢饉状態から脱出することができるからである。
>
> 文学の使命は社会と人民を導くのである。文学は時代と環境に緊密に結び、前進しなければならない。もしも時代と環境に背く作品を描けば、

それは健全だとは言えない。時代遅れのものであろう。我々が必要とする作品は、時代の息吹を帯びた、真実が伝わる内容を持っているものである。我々は血潮と情熱をすべて作品に注ぎ、これこそ完璧な文学作品と言えよう。

文人たちの発言は時代と環境を意識しており、真実が伝わる文学を求めていたことがわかった。これまで政治に踏み込まれていない文学コラムに寄せた若者文人の切なる思いが伝わってくる。

慈燈を含め、文人たちはおのおのの思いから自らの考え方を示している。もう少し文人たちの声を聞こう。

塞翁と署名された10月9日の「創作を論じる」を受け、慈燈は磁燈というペンネームで（「慈」を「磁」にした。1942年にこのペンネームを使用したのは二回だけである）、10月17日に「創作について」（也是谈写作）を寄せている。塞翁は、「私は文章を作成するには、心から声を出さなければならない。時代と環境と著者の情緒を代表すべきであろう。これは書画を模写するように規則従うのではなく、生命力のある、良心的な情緒を発するものである」と述べている。慈燈は塞翁の説を受け入れつつ、過日に『大同報』に掲載された編集者堅矢と周作人との対談に異を唱えている。周作人が「満洲」の青年に、「たくさん読書すること」を呼びかけたことに対して、慈燈は「満洲」では読める本、良い本が少なすぎると反論した。その上で、「私はもっとも大事なことは、創作の質や量の問題ではなく、専門的に研究し、多くの書籍を読破することだ。これはおそらく実現できないだろう」と言っている。ここで、慈燈は創作する前に専門的な本を読まなければならないのだと強調する一方、満洲には青年に提供できる良い本が少なすぎると不満を漏らしたのである。

慈燈はさらに創作には、模倣が重要であると述べている。9月19日に「模倣」（模仿）のなかで、「我々の作品は、すべてゴーゴリのものを引っ張ってきた」というトルストイの言葉を引用し、世界の巨匠も模倣から創作をはじめたことを紹介している。そして、はじめて創作を志す心構えについて、自分自身の経験談を披露している。楊慈燈は、はじめて小説を書く場合は、「模倣」すべきだと主張している。慈燈にとって、「『模倣』は、決して剽窃

や文章の入れ替えではない。これらは不正であり、正々堂々とした模倣の作品とは関係がない。これは蜂が色とりどりの花から蜜を吸ってきて、自分にとって理想的なものを作り上げることと同じなのである。このように自分らしい作品が良いものである」と肯定している。

創作には適切な題材について、9月23日にさらに「題材」（題材）を発表している。創作するには、題材選びがもっとも大切であることだと説いている。慈燈は文壇では一部の作家が恋愛を題材にした物語を否定していることに対して、巨匠ゲーテの『若きウェルテルの悩み』や小デュマの『椿姫』はいずれも、身近な恋愛物語を題材にしていることを例にあげ、満洲文壇の恋愛題材否定論は、恋愛物語をうまく処理できていないからだと分析した。そして、大きな出来事にしても身近な些細な事柄にしても、題材選びが極めて大切だと締めくくっている。

他に慈燈は女性問題について関心を持っていた。5月2日に「知識のある女性」（有知识的女性）で、満洲の女性には知識のある人が少ないとする論調に反論している。「満洲には数多くの一流女流作家がいる。女性歌手や女優も活躍している。女性たちは、何万人もの読者を前にして、自分の文学作品を発表し、理想の男性像を堂々と語ったりする。この行為は知識がなければ、到底出来ないだろう。我々は何の躊躇もなく、他の民族の前で満洲女性がどんなに進歩的なのか、優れているのかを自慢することができる」と述べ、社会に進出している満洲の女性を、積極的に評価している。

5月11日に発表した「男女の恋愛問題」（男女交朋友）では、現代社会で横行している男性の享楽主義と、女性の物質生活ばかり求めている実利的な快楽主義を批判した。健全な恋愛観をもって交際するように戒めたのである。

2　退役後の慈燈文学の特徴

慈燈文学の道のりは軍官学校からはじまり、軍隊生活とともに歩んできたと言っても過言ではない。10年間の厳しい軍旅生活で鍛えられた精神世界は、慈燈の軍旅小説の内容を豊富にしてくれた。

慈燈の退役は新聞紙上で確認することができるが、退役理由についてはもう少し資料を調べる必要があると思われる。陳実は自著の中で以下のように解釈している。[15]

傀儡軍に命をかけたくない。日本人のために戦争に駆り出され命を失いたくない。楊慈燈は重い疾病を患ったことを口実に、1942年についに部隊から離脱することができた。以後、大連に戻り、書籍の出版と新聞に投稿して生計を立てていた。

退役までは、軍事活動をする傍ら創作活動をしていた。戦争の激しさ、むごさが感じられる臨場感のある場面が多かった。退役直後に『大同報』を主な場所として発表した作品には、いくつかの特徴が見られる。

まずは、軍旅小説は以前にも増して、内容が充実してきた。人物描写はより立体的に捉えられ、複雑な心理描写の表現も豊富になってきた。10年間の軍旅生活は、慈燈の文学の質をより高めてくれた。

慈燈は10月11日に雑文「軍隊生活が私に与えた影響」(軍隊生活給给我的影響)を寄稿した。はじめて歩哨の体験を回想しながら、入隊当初に、遠距離徒競走や起床、食事、着服などがいずれも速度が遅く、たびたび落伍していたことを明かしている。「しかし、軍隊生活の自然な力が私を強くし、パワフルになるよう導いてくれた。私の度量はますます大きくなり、健脚にもなってきた。そこで、私の性格はますます活発になってきた」と述べている。当時の文壇の状況については、「一部の文人はもったいぶり、率直ではなく、豪快さも欠けているのは、軍隊で鍛えたことがないからである」と説明し、「軍隊経験のない者は実に不幸だ」と軍隊生活が自分に活力を与えてくれたことを強調している。軍旅生活は自分の文学の源になっていることを印象づけた。

二番目に、使いこなされている擬人法の表現方法である。喜劇的な側面を帯び、暗い戦争小説の雰囲気を一掃するほど、読者の心に感動を与え、引きつけられる。「行軍」などは佳作の代表であろう。

三番目に、慈燈の創作はより論理的になってきた。1942年に『大同報』に掲載された作品の半分弱は、評論と雑文のジャンルに属している。彼は自分の創作信条を守り、「専門的に研究し、多くの書籍を読破」してきた。この間西洋や日本を中心に内外の名著に触れてきた。10年来の創作活動のなかで、

(15) 前掲、『東北淪陥区童話研究』、127-128頁。

慈燈は絶え間なく自身の文学的素養を高めている。

創刊10年目を迎える『大同報』においては、文藝欄に掲載される文藝批評、文藝評論、雑文などは実に充実したものであった。有名無名にもかかわらず、こぞって持論を展開していた。文壇で多大な影響力をもっている爵青[16]もしばしば登場し、文学の独自性を主張した。(9月8日「満洲文学管見」) 日本人の中国文学研究者の大内隆雄[17]の名前も文藝欄で目立つ存在であった。文藝理論の探求はよりハイレベルになり、成熟されつつあったことを見受けられる。

小説「若い人」(年軽人) から慈燈の作家としての成長を垣間見ることができる。主人公李園は税務局の職員をしている。趣味は読書や創作などである。「彼は長編小説を開いた。これは翻訳本であり、男女の恋愛物語である。彼は風景を描写する一段落を気に入り、まず写してから、数文字を書き変えた。このあと、もう一冊を開けた。彼は精彩のある会話を一段落さっさっと写した。これは丸写しでもなく、剽窃でもない。これは文書に沿って良い言葉を学ぶというやり方だ。これは李園の一貫したやりかたである。以前、新聞に当選した佳作はこのようにして、大家の文書に沿って良い言葉を学んで成功したのである」と[18]。まさしく慈燈自身が語った「模倣」精神とそっくりそのままである。

さらに「若い人」の中で、李園は恋人に創作の要を説明する[19]。

> もちろん読書だよ。世界の名著をすべて読んだほうが良い。全部読めなくても、大雑把には知るべきだ。まず、文学史に精通し、それから、生活経験を豊富にする。作家は詩歌、小説または他の作品を書くときに経験豊富でなければ、できないものだ。(中略) 作者はまず経験を豊富

---

(16) 爵青 (1917-1962年)。本名は劉佩である。1939年藝文志事務所に加入し、文壇で「藝文志派」作家として、重要な位置を占めていた。代表作の『黄金の狭き門』(黄金的窄門) は第一次大東亜文学賞受賞し、『麦』は文話会作品賞受賞した。『大同報』に評論を多く寄稿した。

(17) 大内隆雄 (1907-1980年)、本名は山口慎一。満洲国時代に活躍していた翻訳家、評論家である。1925年に東亜同文書院に学び、卒業後に満鉄に入社した。堪能な中国語を駆使し、中国人作家の話題作を精力的に翻訳し、日本に紹介した。『大同報』をはじめ、当時の新聞や雑誌に文藝評論を数多く、寄稿された。『満洲文学20年』(国民画報社　1944年10月) などの著書がある。日本敗戦後、地元で高校の教員や図書館司書をしていた。

(18) 前掲、『楊慈燈文集』(中巻)、949頁。

(19) 前掲、『楊慈燈文集』(中巻)、954頁。

にする。その次に、観察することだ。眼でしっかり観察し、細部まで観察するんだ。

小説の中の会話であるが、著者の慈燈自身の創作態度が投影されている。

おわりに

同時代の文人仲間季瘋は、8月6日の『大同報』「藝文」コラムに「慈燈の作品」（慈燈的作品）を発表し、慈燈文学について以下のように評価している。

現代において、経済機構の改革につれて、文学も面目を変えることになる。19世紀の文学はすでに過去の産物になった（歴史的に残した風流と遊びの文学は、もう紙くず同然になる）。時間と空間の必要に迫られ、現実的な作品（客観性と正常性の作品）を伝統的な文学から新文学に導くことは待ち望んだ道であろう。この移行時期には、大量の作品の誕生が必要である。大量の作品というのは、最大の能力をもって書いたものを指す。厳しい目をもって、これらの作品を批評し、正当な作品の存在を保証する。

慈燈先生こそが多産の作家の一人である。過去数年来、彼の作品は多産で有名である。善し悪しについては過去の作品は現在の作品と同次元で比較することは難しい。以前は童話作品が非常に歓迎されていた。しかし、現在の作品も愛読されている。原因は大衆的であるからだ。なるべくわかりやすく創作し、（内容が薄っぺらで低俗の意味ではない）読者の心を獲得するのである。

慈燈の作品の平易さが、読者層が厚く、愛読されている理由の一つとしてあげられている。慈燈自身が意識していたように知識の蓄積を重視し、それらを作品に最大に生かしていた。慈燈の作品は短編が主となっている。ほぼ新聞に寄稿された1000字程度の作品ばかりである。字数の制限もあり、ストーリーは複雑に展開するのは難しいが、一編ずつわかりやすくコンパクトにまとめられているのが、慈燈の文学力量であろう。

1942年を創作のピークにして、日本敗戦までの間は作品が次第に少なくなっていく。共産党政権で旧満洲時代の軍官は漢奸として精算され、投獄や処刑される厳しい処分を受けた。慈燈は共産政権下で80歳まで生き延びたが、新たな作品がとうとう書けなかったのは、残念としか言いようがない。過酷な政治に翻弄され、自らの人生を振り返る回想のようなものも残されていないこともまた、非常に遺憾である。この問題について楊慈燈の研究者陳実の著書に次のような一節がある。[20]

> 東北が解放されてから（日本敗戦後—筆者）、彼を巡って国民党と共産党が争奪戦を交わすほどの文化界きっての著名人であり、しまいに、彼は共産党に傾倒した。友人の助けのもとで、北京に移居した。（中略）国民党の追跡逮捕を逃れるために、1946年に解放区（共産党支配区域—筆者注）に撤退した。晋察冀行政公署の秘書を務めた。そこから夏園というペンネームを使うようになった。引き続き革命的な文章を発表した。

慈燈が亡くなるまで「夏園」という名前を使って、「革命的な文章を書いた」ものの、すでに往年のような影響力はなかった。若き自分の数々について語ることは絶対にタブーであり、沈黙を貫き、満洲国時代の「楊慈燈文学」と別れを告げる選択をしたのであろう。

楊慈燈文学が再評価されるようになってから、慈燈の家族をはじめ、研究者たちは慈燈が満洲国時代に書き残した文字を丹念に蒐集し、ついに再び日の目を見ることができた。この快挙は満洲国時代文学の研究に大きな貢献であろう。だが、慈燈の作品が中国で再版される際に、政治的な枠組みにとらわれ、時局に迎合すると思われる作品や文言が削除されている。一定の枠組み内で作家を評価することしかできない現状は、文学のありようからすれば創作の意図がぼやけてしまい、その人物の真の姿が見えなくなる。

楊慈燈は大きな志を胸に満洲国軍に入隊し、将校になることを誇りに思っていた。作品に見える戦友への限りなくあふれる愛の描写がその証しであろう。慈燈は愛憎がはっきりしており、軍隊に散漫されている軍閥の悪習を憎

---

(20) 前掲、『東北淪陥区童話研究』、128頁。

しみ、軍官学校で身につけた知識を兵士たちに伝授し、近代的な軍隊になることを望んでいた。若者が思い悩んでいる小説の主人公は、慈燈自身かもしれない。10年間銃弾砲火の洗礼を受けてきた青年将校は、除隊後に将来に対する不安があったに違いない。特別な環境で成長してきた青年軍人は、新興国家の植民地の欺瞞性を見抜くことは考えにくい。時局に迎合する言動があることは、むしろその時代の現象であろう。時代背景を見極め、ありのままの楊慈燈文学を凝視すべきではないだろうか。今から80年前の一次資料を目の前にし、歴史の重みをかみしめながら、楊慈燈文学から伝わってきた世界の意義深さを改めて感じ取った。

本論は楊慈燈の1942年『大同報』に掲載された軍旅小説と評論・雑文を中心に見てきた。

資料の欠如により、不明な部分や釈然としない疑問点がないわけではない。なお、東北随一の童話作家としても名高い慈燈の童話世界についても、研究に値する。本論の趣旨と異なるため割愛した。このテーマは今後の研究にしたい。

（完）

（本学教授）